

国際 NGO サポート ボランティアの「志向」に関する考察

～ベトナム・FFSC ボランティアへのインタビュー調査より～

宮嶋 淳（中部学院大学人間福祉学部） 4662

〔キーワード〕 国際 NGO、サポートボランティア、ベトナム、インタビュー

I. はじめに

NGO（=Non-governmental Organization の略。非政府組織）という用語は、国連の経済社会理事会から生まれ、開発途上国の貧困問題に取り組む国際協力 NGO や地球環境問題に取り組む環境 NGO、平和協力や人権問題に関わる NGO など、関わる問題ごとに役割区分がなされている。代表的な日本の NGO には、「シャプラニール=市民による海外協力の会」「シャンティ国際ボランティア会(SVA)」「セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン (SCJ)」「日本国際ボランティアセンター(JVC)」「ワールド・ビジョン・ジャパン」「日本国際民間協力会 (NICCO)」などがある。

本報告における「国際 NGO」とは、開発途上国であるベトナムにおける貧困問題、とりわけストリートチルドレンとその家族の問題に取り組む、ベトナム・ホーチミン市に拠点を置く FFSC（=ストリートチルドレン友の会；FRIENDS FOR STREET CHILDREN）をさす。なお、同 NGO の設立関係者である吉井（2009）『立ち上がるベトナムの市民と NGO ストリートチルドレンのケア活動から』における「ローカル NGO」と本報告でいう「国際 NGO」とは同一組織をターゲットとしながらも異なる概念規定をしている。本報告における「国際」が意味するところは、「国境」という空間的物理的な距離を捉えて標記している。なぜなら、本報告におけるインタビューは、日本とベトナムに跨る移動を経てもなお、同一組織=FFSC をサポートし続けているボランティア（「サポートボランティア」）である。

II. 研究の視点と方法

(1) 研究の視点

本報告は、日本とベトナムという物理的距離を超えてベトナムで活動を続ける国際 NGO をサポートする日本人ボランティア（「日本人サポートボランティア」。サポーターは、米仏越におり、それらのサポーターと区別するため「日本人」と付記。）に焦点を当てている。国境を越えてなお、なぜボランティア活動を継続しているのか、何を志向しているのか、国境を越えたサポートボランティア活動の意義と意味をどのように見出しているのかを再発見することをめざした。報告者は「若者が社会に出る前に1年程度のボランティア活動を体験することが望ましい」という言説に共感し、それは母国を離れて体験されることにより、より一層意義と意味が増すに違いないと考えている。

本報告は、日本とベトナムという物理的距離を超えてベトナムで活動を続ける国際 NGO をサポートする日本人ボランティア（「日本人サポートボランティア」。サポーターは米仏越におり、それらのサポーターと区別するため「日本人」と付記。）に焦点を当てている。

国境を越えてなお、なぜボランティア活動を継続しているのか、何を志向しているのか、国境を越えたボランティア活動の意義と意味をどのように見出しているのかを再発見することをめざした。

入江（1999）によれば「人々がボランティア活動をするとき、その背後には・・・それを支えている思想がある」としており、ボランティアが「自発性・無償性・公益性などをそなえた行為だ」とされる。そしてボランティアの条件や特徴についての議論のために「(1) 個人のボランティア活動の条件 (2) ボランティア団体の条件 (3) ボランティア団体のスタッフの条件」を区別しなければならないとしている。入江の見解を支持すれば、ボランティアを研究していく際、行為に関する性質・特性とそれを行う主体のあり様は研究のための基本条件となる。したがって、本報告では「行為に関

する性質・特性としての『志向性』とそれを行う主体である「個人」すなわち、上記で概念規定した「日本人サポートボランティア」に視点を当てていくこととする。

なぜ「志向性」なのか。従来までボランティアの性質・特性として議論されてきた主な性質・特性には上記の3つのほか、「創造性、先駆性、発見性、ネットワーキング、継続性、専門性」などがある。これらについては既に多くの研究がなされており、近年では守本（2013）が「ボランティア活動の3つの性格（自発性、社会性、無償性）に揺らぎが見えてきた」と述べる考察が深められている。

「志向性」とは何か。「志向性」とは、フッサールの現象学用語で、意識は常に何者かについての意識であることを表し、「何者か」という対象への認識は、実在そのままでなく、志向性によって構成される。また、ブレンターノは志向性とは意識のあらゆる活動、つまり心的現象の持つ特性であって、心的現象は志向性によって物質的・自然的現象から区別されると述べている。このように定義できる「志向性」という性質を援用することによって、柏木（1996）の「ボランティアは好きだからやる」という主張や早瀬（1994）の「ボランティアは恋愛に似ている」に対する明確な応答が出来る可能性があるのではないか。

近年の人工知能や心の哲学において「志向性」は論争の的となっている主題であり、機械には決して成し遂げられないものが「志向性」であると主張されている。この主張を援用すれば、「志向性」に基づくボランティア研究は、「ボランティアの本質は人間性（人間力）」であるといえるかもしれない。サールは、「志向性とは、世界内の対象や事態に向けられ、あるいはそれらに関わり、あるいはそれらにつて生じているような、多くの心的な状態ないし出来事だけの特性である。」と定義し、議論を展開させている。そして「志向性」の特性は、①いくつかの心的な状態ないし出来事だけが志向性を有しているのであって、信念、恐れ、希望、願望などが志向的であり、神経過敏、得意、対象なき不安などは志向的ではない。②志向性は意識と同じではない。③「意図」は様々な「志向性」の一形態にすぎない、と述べている。そして志向的状态とは「信ずる、恐れる、望む、欲する、愛する、憎む、忌避する、好む、・・・などのように、本質的に何かに向けられているか、あるいは・・・何かに向けられていることが可能であるか、のいずれかである。」としている。つまり、方向性（ベクトル）が存在する。ボランティア活動が何らかの対象に向かってなされる行為であることに依存はないと考える。その方向性を「志向性」として考察を深めていくことは可能なことではないだろうか。またサールは「志向的状态と発話行為の類似点」や「発話の心的方向性」についても考察しており、「志向的構成要素」とその順序が「視覚（経験）→記憶→意図的行為→先行意図」ではないと主張している（先行意図とは、何かをしようと意図して、それを表象すること）。そして表象としての発話は、話し手の意図であり、その意味は「より原初的な形式の志向性によって完全に定義される」し、「本来的に言語的ではない形式の志向性によって定義される」とされている。つまり、サールの主張を支持的に援用すれば、私たちがボランティア活動に参画するとき、「志向的構成要素」を経由しなくても、その他の経路でボランティアに参加・参画することがあり得ることを実証する必要がある。

さらにサールは「自由意志」を脳の中に位置づけすることができるのかについても考察し、「ある時間 T1 において行為者の心には信念や欲求があり、それは続くある時間 T2 において行為として実現されるのであるが、T1 と T2 のあいだにある飛躍（Gap）を、実際の脳の物理的なプロセスのなかにもどのように位置づけるのかと問うている。つまり、ボランティアを考えると、「私たちはなぜ自主的自発的にある対象に向かって行為するのか」を説明していく必要があるのではないか。

報告者は「若者が社会に出る前に1年程度のボランティア活動を体験することが望ましい」という言説に共感し、それは母国を離れて体験されることにより、より一層意義と意味が増すに違いないと考えている。サールのいう飛躍（Gap）を、暗黙のうちに受け入れているような感覚になる。

(2)研究の方法

報告者は、2012年8月並びに2014年9月にベトナム・ホーチミン市を訪問し、FFSCの活動をフィールド調査した。また、現地で活動する日本人ボランティアにインタビュー調査を行った。さらに2014年11月、東京都内のホテル・ラウンジで日本における連絡窓口を務めるボランティアにインタビューを行った。本報告における研究方法は、文化人類学というフィールドワークの手法を参照し、参与観察者である報告者の感覚と記録・記憶、関心にに基づき、日本人ボランティアへのインタビュー項目を構成し、インタビューの発話を分析するというものである。

III. 倫理的配慮

文献調査については、その出所を明記する。インタビュー調査においては、電子メールで①訪問の目的、②質問項目、③データの管理方法を提示し、アポイントをとり、了承を得た。また、インタビュー調査当日においては、文書を確認し、発言の録音とデータ化、並びに写真撮影の許可を得た。

IV. 調査の結果

(1) 日越でのインタビューの具体的な活動

ベトナムでの活動：週2～3日・3年間、複数の日本人ボランティアとのローテーション、日本の里親さん向けの広報活動、訪問客への通訳・案内

日本での活動：里親さん等からの「問合せ」への対応、本部（ベトナム）への連絡、ビギナーへの対応

(2) FFSCのボランティア・システム

現地で採用されるサポートボランティア同士が帰国後、連絡を取り合うということもほぼなく、米仏ともつながりは薄い。ボランティア・システムとしては「希薄なネットワーク（弱い紐帯）」といえる。各国からベトナムのストリートチルドレンを支援する里親間のつながりも薄く、里親が高齢である傾向も加味し、現地を訪問する里親もそれほど多くない。「弱い紐帯」を維持し続けていられる誘因は「ベトナム戦争」という記憶と「子どもらの成長」という証と喜び、そして「無理のない負担」である。

(3) 対象の志向

インタビューの発話を再構成すると、以下の図のようになる。ベトナム在留中における体験と記憶は、日本でのボランティア活動と、図中右側の「志向」と整理できる枠組みを通してリンクしている。

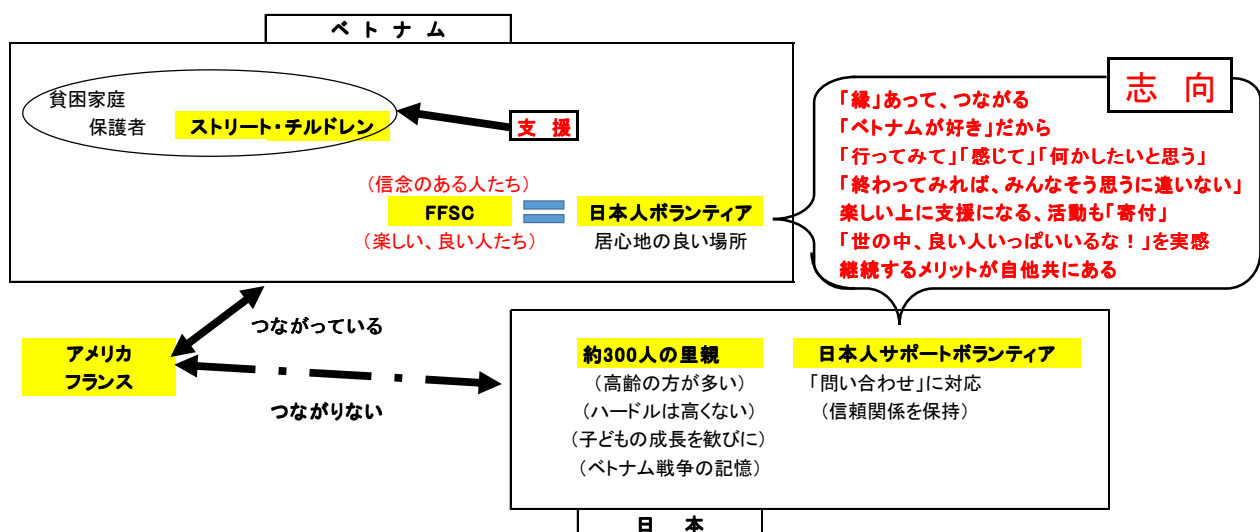


図1 日越両国でサポートボランティア活動を行った日本人ボランティアの経験と志向 出典：筆者

V. 結論

インタビューの発話を再ストーリー化しまとめれば、次のようになる。

ベトナムに夫の仕事の関係で行くことになり、はじめの半年は現地を満喫した。その後、遊び疲れて、現地の友達がほしくなり、たまたまボランティアと出会った。そこで出会ったスタッフが信念のある、楽しい、やり深い人たちだった。そこは私の居心地の良い場所になった。

「縁」あつてつながり、ベトナムを「好きになった」。「行って見て」「感じて」「何かしたいと思う」。ボランティアをした人は皆そう思うに違いない。日本に帰ってきてボランティア活動をするのは、それも「寄付」だと思うから。そして「楽しいうえに、支援になる」から。「世の中、良い人がいっぱいいるな！」を実感できるから、活動を続けるメリットが自他共にあると思う。

本報告の結論は、国境を越えて体験した「良い記憶」は、長く保持される。この記憶化された体験は、その記憶を構成した体験を想起できる状況に人間を居続けさせられるならば、物理的距離とは関係なく、人間の志向を強化しつづけられる可能性がある、というものである。

資料

インタビューの概略

以下の Q&A は、本報告における「志向性」を考察するためのコンテキストであり、図 1 を得るために重要なテキスト部分に、アンダーラインを付した。

Q1：FFSC のことを知ってボランティアを始められることになったきっかけと経緯は？

A1：2001 年にベトナムに初めて行き、それまでストリートチルドレンの S の字も知らなくて、主人の仕事で行って、初めて町で「物売り」っていう子どもを見て、初めて知ったんです。

それで、もう何か全部「飽きちゃったな」「何かしなくちゃいけないかな」と思った時に、「ボランティアならいいのかな」と思って探し始め、日本人婦人会っていうのがあり、ボランティアを募集されていたので応募しました。ベトナム人の友達も欲しかったし、「ベトナムのことをもっと知りたかった」ので、何か面白いかなと思って始めました。

Q2：ボランティアをやろうというのは、ベトナムの印象が良かったから？

A2：もちろんそうです。何か「役に立ちたい」というと、おこがましいですけど、「何かできるかな」というのと、あとやっぱり自分がまだ「何かできるのに、何もしていない」ということが、何て言うか「もったいない」というか、そういうのがすごくあってやりたかったのです。

わたしは結構、知りたがり屋なので、あちこち行っただけ、もっと行ってないところへ行ってみたくとか、ベトナム人と「もっと深く付き合いたい」とかって、物売りの人だけじゃなくて「友達が欲しい」とって思って、かな。

事務所のスタッフはすごい良くしてくださって。知り合い程度の人もいっぱいですけど、でもシスターハンとか、何もしなかったら絶対会えない人たち。あと子どもたちも。知らないで帰ってきたらもったいないかな。

Q3：実際にボランティアは何年間、やられていたのですか？

A3：2003 年に始めて 2006 年に帰ってきたので、3 年間。

Q4：具体的にはどのようなボランティア活動だったのですか？

A4：一応、広報担当で募集があつて、あつちの事務局はベトナム人スタッフが 7~8 人いて、ちゃんと会社みたいに経理の人がいたりとか分担が決まっていて、日本人は日本人の支援者の係みたいになっていて、代表が朝日新聞で出した広告で、里親が結構 300 人ぐらい集まっていたのです。

Q5：その 3 人の方々と、今、お付き合いはあるのですか？

A5：1 人はまだベトナムに。でも子育て中。その他もみんな子育て中です。もう 1 人は今、愛知県在住。

Q6：メーリングリストやラインみたいな連絡は？

A6：結局、みんな交代して一緒にやっていたわけじゃないので、面識がない。名前しか知らないみたいな人が多いので、あまり会わないし連絡もないし、何かそれを組織して何かしようっていうこともないです。

Q7：向こうのほうが、日本にちゃんとしたセンターを持つとか？

A7：必要性がないのだと思う。

Q8：Aさんが個人じゃなくて、事務局にしようみたいなこととかは？

A8：結局、お金のことが。連絡係がわたしなので、お金のことは多分お身内のほうがいいだろうし、日本で何かすることもない。多分、資金が足りていて、何かお金を集めなきゃみたいなこともないし、やっぱりベトナムのNGOなので、日本でのセンターは、わたしはいらなかな。ただわたしみたいな連絡係はいたほうがいい。

それですごく不便っていうか、日本人からしてもどうやって連絡取っていいか分からないみたいな感じでした。わたしたちからしても、郵便出しても戻ってきちゃうし、この人どうなっちゃっているのだろうみたいな人が結構出てくるので、その連絡係がいなかったのです。それで、わたしが「連絡係りになろう」と。

Q9：事務局経費とか、実費とかが出たりするのですか？

A9：わたしはこの活動が「寄付」っていうか、その経費を寄付しているようなつもりで、子どもたちへの奨学金は出してないのですけど。

駐在員の奥さんがボランティアをやっているパターンだと「お金ほしい」とは思わないけど、個人で、ボランティアで来る人は、バイトしながらボランティアするので、ちょっとは出してあげたいっていう気持ちもありますよね。大変だから生活が。

Q10：子どもたちに毎月、里親さんは月3,000円を送金される。年に3万6,000円になって、それが10年で36万。成人するまでって考えれば、結構、大きいですよね？

A10：70万円になったら結構、大きいですよね。その3,000円で子供が道でものを売ってたりすることをしないで済む。その上、勉強することができるっていうことで、町でものを売ってというのはただ労働ってだけじゃなくて危険。交通事故とか悪い人に目を付けられるとかそういう危険性もはらんでいるので、それから遠ざけることができるっていうのはすごく大きいことなので、そのあたりをお話して、大きくなるまで見ていただければ、大学に行けるようになる子もいるし、自分で自立できる子もいる。

結局、負の循環、親が貧乏だから子供も貧乏っていうそういう循環の中から出してあげるためにすごく意味のある支援になるので「お願いします」と言います。

Q11：里親さんは日本だけでなく、アメリカやフランスにもおいでになるのですが、そこのつながりはあるのですか？

A11：全然ないです。そっちはまたそっちのとりまとめ的な人がいる。ソイさんはフランスに留学していたので、人脈とか。あとはスタッフもアメリカに留学して、ソーシャルワークしているので、そういう人脈とかがあるのかな。

Q12：里親さんとして子どもをこちらに呼ぶっていうこともできるのですか？

A12：それはできません。やっぱりビザ、今まで前例がないです。

結局、代表がいつも言っているのは、「さすらいもの」っていうか。子供たちは今、親が仕事を求めてさすらうから、定住しない子が多い。何年かするとあっちでいい仕事があるからって行っちゃうし、やっぱり田舎に帰りますって帰っちゃうし、ずっと支援するつもりでいても、親の都合でまた違うところに「さすらっていく」っていう性質の人が多から。だから、最初に「注意書き」みたいに書いてあるのですけど、ずっとできるわけではないかもしれない。ずっといる子もいるけど、結構やっぱり田舎に帰りますとか、家の事情で引っ越し人が多いので、そういう性質の人たちだっている。こういうおうちだからやっぱり定住っていうよりは一時のしのぎみたいな感じになるかもしれないと。

結局、その追跡調査をしてないので、そういう人たちが結局どうなっていたかっていうと、全く分からない。すごい思い入れがあって「あの子どうなったの」っていうふうに思っている里親さんもいるのですけど、「もう全然分かりません」っていうか、結局、そこにお金をさけないので、去る者は追わず。研究者だったら多分それを、追跡調査をするのでしょけど。

やっぱり何年かに1回は見ておかないと。そろそろ行かないと。

Q13：子どもたちは「お父さん」「お母さん」って、手紙くれるわけですか？

A13: うん。嫌な人もいると思う。「お母さんじゃない」って思っている人もいると思うけど。ほかに呼びようがない。

「支援者の方へ」っていうのも硬いですし。「日本のお父さんお母さん」っていう感じ。

Q14: 応援してくれている人たちっていうのは、「現地に行こうかな」みたいなことを思われている人が多いのですか？

A14: 行く人は 1 割もないのではないですか。やっぱり高齢者だし、海外に手紙を出したこともないみたいな人が多いので。ただ結構、ベトナム戦争の時に「自分は何もできなかったから」っていうような思いをお持ちの方が結構いる。それで今やっていると。あと各地域のリーダー的な人がいて、その人に「誘われて」っていうか、その人と一緒にグループで、みたいな人とかが。ベトナム戦争を知っているぐらいの世代は、ベトナムって何かやっぱり支援の必要な国っていうふうに思われているのかなど。わたしがもし現地にいる時に訪問されていけば、会いますが、その方たちも決してそうしょっちゅう来るわけじゃない。あまり会ったことはないです。お会いするのは本当に一握り。

結構、そのお手紙で「励まされました」っていうお手紙をわたしがいただくのです。わたしが差出人になっているので。里親さんから。

支援する人も心の支えにしている人が多いですよ。自分を信じているっていうところが何か、生きがいていう人もいらっしゃるから。手紙がうれしかったとか。そういうつながりが、何か「すごい、うれしい」というか、普通に暮らしていると善意ってあんまり見えないじゃないですか。これをやると人の善意がすごく見えるというか、世の中に「いい人いっぱいいるな」って、そういうふうに思える。

Q15: 現地から遠く離れた日本で「個人ボランティア」を続けておいでになるエネルギーの源は？

A15: 継続するメリットが自他ともにあるという感じですかね。事務局にとっても役に立っているだろうし、自分でも。

結局、わたしがいると便利っていうのが理由かな。わたしが一番よく分かっているのだから、こういうことしてくれる人がいる。それだから、それは「いたほうがいいだろう」って思えるのと、あとわたしも「ベトナムが好きだから、かかわってみたい」っていう気持ちと、あと「いい人いっぱい知り合いにでき、それが楽しい」っていう感じですかね。

ソイさんが会の創設者で、やっぱりソイさんはキリスト教の考え方をよくおっしゃっていたのが、「人類みなきょうだい」みたいな。それで、困っている人がいれば普通に助けるのは当たり前っていうので、それで「ストリートチルドレンと社会の間に橋渡しをする人が必要」っていうのはよくおっしゃっていた。わたしはどっちかっていうと「日本人とベトナム人の橋渡し役かな」と思って、それに共感してやっています。

熱心な方は一生懸命なのです。あの子に塾に行かせたいとか、英語を習わせたいとか、何かプレゼントを贈りたいとか、そういう細かな要求があるのです。そういうのをわたしが聞いて、「こういうふうにしたくなって言っていますけど」とか、そういう連絡係やっています。

組織が大きくなっちゃうとそういうのって、もうお金はみんな一カ所に集めて、「1人ずつ」じゃなくなっちゃう。

「別にできる」のがあそここのいいところ。

Q16: 現地で一番感じたことは？

A16: 向こうで一番思ったのが、お金を持っている、何かに使ってほしいって思う人は、結構申し出がある。受け手としては、「これに使いたいんだけど」っていうニーズがあります。

里親さんは月に 3,000 円。そのうち、子どもに行くお金は間接経費を引いて、60 パーセント。ビンチュウセンターって、すごく立派ですけど、ほかのセンターはもう壁もないし黒板もないしみたいなところをもっと何か支援したいけども、結局、地域の事情で目立ったことができないっていうそのジレンマがあって、一番やりたいところにお金がかけられなかったっていうのがすごく残念。

ビンチュウセンターあそこは、FFSC の自分の所有地で、警察とも仲良くて、お金をかけても大丈夫だったけど、ほかのセンターは結局できなくて、ビンチュウセンターに皆さん連れて行くので、あそこに行くと、みんな「うまくいってるんだ」っていうふうに思って、「もう支援がいらないんじゃないか」って思われちゃう。

でも、実際はほかのセンターはもう全然ぼろぼろで、お金もなくてってところをちゃんとやっていかないと、支

援が「アフリカのほうが大変よね」みたいになっていくので、その辺、気を遣いました。

Q17：ベトナム独自のあり方みたいなものが「原動力」なんですか？

A17：結局、そうでしょうね。でも一番困ってそうなアフリカとか、もっと全然困っている国いっぱいある。だけど、自分がどうしてベトナムを支援するのかなくなって思えば、やっぱり「縁があったから」としか思わない。みんなそれぞれ「縁がある」ところとやればいいかなくなって思います。

「何でベトナムなんだ」とか「何で日本なんだ」とか、「なぜそこがモデルなんだ」とか、そんなことを気にするのは面倒くさい。それはもう「出会ったから」としか言いようがないです。

やっぱ、行ってみて感じることもあると、「ああ、何か助けてあげたい」とか思いますものね。資料を読んでいても「ピンとこない」というか。行く前から頭の中で考えちゃう人に対しては無理。

これはもう何か本当に不思議なことで、自分が嫌なことがあったりつらいことがあったりした日に限って、ボランティア先で良いことがあるのです。何か誰かがすごいいいこと言ってくれたり、すごく優しくしてもらったり、不思議でした、すごく。だからもう何だろう、それでベトナム。

結構、わたし、つらい時があったんですけど、ボランティアしていたことで続けられたっていうか、助けられたっていうか、不思議でした、本当に。もうつらい時に限って良いことが。不思議、本当に。

だから、みんなそうなのかなって。つらい時ほど人の優しさが「身にしみる」っていうのはあるかもしれない。

日本ではやっぱり里親さんからの、お礼のお手紙をもらったりしたときが多いですかね。お電話、もらったり。そうですね。いつもそうでした。だからボランティアを続けていたのかな。嫌な思いをすることはなくて、いつも良いことがある。

やってみないと分からない。体験してみないと。人に「何かしてあげたい」という気持ちをお持ちの方が多。お金持ちだから寄付しているのじゃなくて、結構、年金の中からとか、「結構苦しいんですよ」とか言いながらやっている人のが多いです。そういう人って少ない中からでもあの子のためにちょっと出すっていうのが喜びっていうか、そういう人が多いかな。

何て言うのだろう、終わってみれば、みんなそう思うに違いないと思う。

Q18：これからもずっと続けていけるだけ続けていくという感じですか？

A18：ほかにやりたい人がいたら、「代わってあげたほうがいいかな」とか、ちょっと思っているんですけど。

いっぱい向こうでボランティアしていた人で帰ってくるので、もしかしてやりたい人も、わたしみたいに「つながりたい」とって人もいるのかなって、ちょっと思っ。

ただ働いていたり、フルタイムの人とかは大変だけど。交代・交代でやるというのが、やりたい人がいれば代わります。わたしはそしたら里親になろうかなと思って。縁は切らない。やれるだけやります。

でも、だんだん情報が古くなってきているのです、わたしのなかで。あっちの状況が変わってきているから。ちょっとそれはアップデートしなきゃいけないかな。帰国してから2回行ったんですけど、でも、やっぱりすごい変化が激しいですよ、今、ホーチミン。支援の状況とかも変わってきているかなって。行った人に、すごく立派になっていたから、「もう支援はいいわね」と言われたって、私としては「そうなのかな」とって思っ。何かその辺を見に行っったほうがいいかなって思っていますけど。

Q19：今後の活動とか事業とか、思うこと考えることとか何かありますか？

A19：ストリートチルドレンが減るのが一番いいと思う。施設の充実は、寄付を辞めなくなる人が増えるので、本当に必要かどうかというところは見えにくくなってきちゃうかなっていうのも思っ。

ただ運転資金は必ずいる。そこをうまく訴える。多分今、お金に困ってなさそうに思っんですけど、スポンサーがついているから。その人がいつ辞めるかっていう感じで。それを思っると必ず継続資金は必要かな。

あとは支援する人も活動を心の支えにしている人が多いので、そういう人のサポートをわたしができればいいかなって思っ。だいたいお金のことで、日本人の支援者も行っったこともないところ、にお金を送っているから、ちょっと疑心暗鬼はあるのですよね。誰でも。ちゃんとやっているのかなって。手紙とメッセージ・レターを見て「まあやってるのかな」みたいに。けどちょっと何かあると、やっぱり不信感を持たれやすいので、そこはすごい気を

付けています。

わたしがそこにいる意味があるかなと、ちゃんとやっているっていうことを日本語で話すっていうことが必要な時はあるかな。だって、奨学金は、知らない人にお金を送っているみたいなのです。

文 献

吉井美知子（2009）『立ち上がるベトナムの市民と NGO ストリートチルドレンのケア活動から』明石書店

吉井美知子（2004）「都市化 お金持ちから不法滞在者まで」今井昭夫、岩井美佐紀編著『現代ベトナムを知るための 60 章』明石書店、pp147-150

入江幸男（1999）「ボランティアの思想－市民的公共性の担い手としてのボランティア－」内海成治、入江幸男、水野義之編『ボランティア学を学ぶ人のために』世界思想社、pp4-21

守本友美、吉田忠彦編著（2013）『ボランティアの今を考える』ミネルヴァ書房

柏木宏（1996）『ボランティア活動を考える』岩波ブックレット

早瀬昇（1994）『元気印ボランティア入門』大阪ボランティア協会

ジョン・R・サール著／坂本百大監訳(1997)『志向性 心の哲学』誠信書房